

講演 佐藤 順子先生

「東洋英和の歴史に学ぶー建学の精神に生きることー」

今まで東洋英和で教師として働かせていただいた中で、ずっと考えてきた、東洋英和の建学の精神「敬神奉仕」とは、今の時代に生きる私たちがどういうことをすることか。生徒たちに繰り返し話してきた東洋英和の歴史の中のいくつかのエピソードをお話して考えてみたいと思います。私は 33 年間東洋英和で働かせていただいたことを本当にうれしく思っています。感謝のほか何もありません。本当に幸せだったと思っています。

子どものころ、世田谷の松原に住んでいました。小さな教会が自宅でしたが、その前にお住まいだった英和生と、教会に通っていた英和生に大きな憧れをもち、どんな学校なのだろうと、思いながら過ごしていました。

教師となって英和に入ってみると、東洋英和とはこういう学校です、教師たるものはこうしなければいけない、というようなマニュアルや教科書はなく、先輩の先生方の職員会議や礼拝でのお話や、お休みの時のお話の雰囲気や学んでいきました。また斉藤先生、黒川先生、清野先生がたが折に触れてお話ししてくださる東洋英和の歴史を繰り返し聞くことで少しずつ東洋英和の教師になっていきました。生徒たちからは、よくいたずらされ、泣かされましたが、生徒たちによって鍛えられました。嫌なこともたくさんありましたが、一時的に辞めたいと思ったこともありましたが、今はここで働けた、という感謝の気持ちの方が強いです。

担任は一度だけ、中1、中2、中3をもちました。この生徒たちもかなり手ごわい生徒たちでしたが、やはり担任は教師の醍醐味だと思い、毎年担任になることを希望しましたが、かなえられず、私は東洋英和には聖書の教師としていさせていただいたのだ、東洋英和の生徒たちに聖書の福音を伝えること。キリスト教の学校なのだから、このキリスト教が揺らいだりしないように守っていく勤めがあるのだ、担任をしていたらそれが出来ない、と自分に言い聞かせてきました。

今年の2月に発行された「カナダ婦人宣教師物語」という素晴らしい本の中から、私が最も好きな東洋英和の歴史のエピソードをお話して、建学の精神-敬神奉仕について考えてみたいと思います。かつてここで生徒として学ばれた皆様が信仰のある無しに関わらず、自分が今置かれている場所で、敬神奉仕の精神をもって生きるとは、どのようなことなのか、少しでも感じていただけたら幸いです。

建学の精神とは、なんでしょうか？

まず、第一に、創立者の初めの志、思い、情熱である、ということです。次にそれは、どういう生徒を育てたいか、どういう学校であるべきか、という東洋英和の教育の最大の目標である、ということです。三番目に全ての教育活動を支える根本姿勢である、と考えています。建学の精神は、学校がどうあるべきかを問うとき、常にそこに立ち戻る原点です。また、東洋英和を東洋英和とならしめている英和の命そのものです。

創立記念日は学校の原点ですから、一年に一度全ての者が集まり学校の歴史をふりかえり、創立者たちの熱い情熱にふれ、東洋英和に連なる者たちが、どのように生きるべきか、

教師も生徒もどこに立っているか、どこに立つべきかを確認する日であると考えてきました。

学校の歴史は過去の人々だけが作ってきたのではなく、その時代、その時代、そして現代を生きている私たち、教師も生徒も一緒に歴史や伝統を作っているのです。今ここで生活している人たち、かつてそこで生活した人たち、それぞれの日常の生き方そのものが東洋英和の歴史になり、校風になり、伝統になる、ということです。生徒であれ、教師であれ、卒業生であれ、東洋英和が貫いてきた大切なものをしっかりと継承して次の世代に引き渡す責任があると思います。

初代校長ミス・カートメル

センテナリー教会で開かれた集会で、日本への婦人宣教師を求めるアピールに対して即座に手を上げて、「私がここにあります！私をおつかわしてください！」と名乗り出たのです。誰もしたことの無い冒険を試みたいとか、有名になりたい、とか考えたからではありません。彼女は自分の使命は何か、神様は自分に何を望んでおられるのか、ということ祈りながら神様から答えを待っていたのです。そして他者を己のごとくに愛し、他者のために自己をささげる、という生き方をしたのです。

一昨年の夏、生徒たちがカナダに語学研修に行ったとき、偶然お会いした、ミス・カートメルのお兄さんのひ孫にあたるミセス・カー夫妻と最後の宣教師であるミス・ボールを創立 125 周年にお招きました。初めてお会いしたときから、何か親しみを感じさせる暖かな雰囲気とともに、自信と威厳と品位に満ちたお人柄を感じ、まるでミス・カートメル先生とお会いしたような嬉しさを感じたことを覚えています。東洋英和の宝として学院に保管されているミス・カートメルの聖書からは、祈ることと同時に聖書を読むことから自分自身の生き方を方向付けていた、ということがよくわかります。彼女の聖書のあちこちには、線が引かれ、読んだり学んだりした日付が記入されています。日本に来て約2ヶ月後の日付で、このような書き込みがあります。—1883年1月21日 詩篇 141 編 3 節 日本語で最初に覚えた聖句「願わくは我が口に門守を置いて、我が唇の戸を守りたまえ」現代語訳では、「主よ、私の口に見張りを置き、唇の戸を守ってください。」となっています。詩篇 141 編は、ダビデが作った詩篇で、私の言葉も行いも悪から遠ざけて、私を守ってくださいという祈りの言葉です。新しい重大な責任を担った先生は、言葉も行いも思いも生き方全てが悪から守られ、神様の心にかなう者

となることを切に祈り求めていたことがわかります。また、ヨハネ伝 13 章 15 節「我汝らに模範を示せり。我が成ししごとく、汝らの成さんために。」という言葉の横に—1885年のモットーと記されています。最後の晩餐のときに、普通は僕らがするお客様の足を洗う、という仕事をイエス様自らがなされ、弟子たちの足を洗ったときに、おっしゃった言葉です。「私があなたがたにしたとりに、あなたがたもするように、と模範を示したのである。」というのが現代語訳です。

聖書に挟まっていた紙には、ある詩を引用して書かれた先生の言葉があります。「信仰を持って仕事をしなさい。崇高な仕事で、必ず成功すると信じて。あなたの毎日の生活に起こることを、卑しいとか、取るに足りぬとか考えずにあなたの最も卑しい仕事でも、それを行うあなたの精神で高めなさい。偉大な善なる生活を目指して、出来るだけ向上しなさい。

そうすれば、より深遠な魂の潮の満ち干が我々の最も内なる存在へ流れ込み、無知なる我々を全ての卑しい災いから救い上げてくれる。」

まさにこの聖書はミス・カートメルにとって片時も離せない伴侶であったと先生の聖書を判読し解説をしたミス・ブラウン宣教師は書いておられます。祈ることと聖書を読むことは、先生の思いと言葉と行いとを

神様の前で正し、自分の考えや欲望を押し通し、他の人を配慮しないで自分を第一にしようとする誘惑から自分を守るために必要なことだったのだと思います。どんなときにも聖書の言葉によって自分自身のあり方を振り返り、反省し、悔い改め、新しい自分になって前へ進んでいったのでしょう。人に自分を強く見せたり、大きく見せたり、偉く思わせたりするのではなく、聖書を読むことによって他の人に仕える愛の心で生きることが出来たのでしょう。どうしたらよいか迷うときには、聖書の言葉から示唆を与えられ、インスピレーションを受けていたと思われます。このように、聖書の言葉に従うこと、聖書の御言葉によって生きる道を教えられること、これこそ「敬神」に他なりません。

次に、健康を害したミス・カートメルに代わって第二代校長になったミセス・ラージに起こった悲惨な出来事は皆様よくご存知だと思います。寄宿舎に押し入った日本刀を持った二人組の強盗によってご主人は惨殺され、ご自分も顔や指に大怪我を負われたのです。けれども先生はこのような非常に悲しい不幸な出来事の中で、この犯人の罪を許してください、と神様にとりなしの祈りをささげたのです。そしてこの不幸な出来事が、日本の国の幸いになりますようにと行って神様にお祈りした、というのです。人との関係において、さらにそれを悪くしたり、悪口を言ったり、人を責め立てたりせず、人との間に平和を作り出していく生き方、それを実践した先生と言ってもよいのではないのでしょうか。「敬神奉仕」の精神を持って生きるということは、信仰のある無しに関わらず、日常生活の中で、人との関わりの中で、平和を作り出して生きる、ということになるのではないかと思います。

次の第三代ミス・ブラックモア校長は、第七代、第十代、第十四代と4回にわたって校長を務めた先生です。とても厳しい先生だったようですが、けれども本当に慈しみと愛にあふれている面もお持ちの先生であられたと言われています。

私がこの先生のエピソードの中で一番好きなものをお話します。新しい校舎建築にとりかかったその矢先に2度の台風で2度も建築中の校舎が崩壊してしまいます。それを見た生徒も先生もそしてブラックモア先生ご自身も大いに悲しみ嘆き落胆なさったと思います。けれども、ミス・ブラックモアはしばらく静かにお祈りした後、こうおっしゃいました。「雨の後には虹が出ます。恵みの虹を信じましょう。」と。これは、単に雨が降った後には虹が出る、という自然現象をいつているのではないと思います。先生はこのとき、聖書の中の虹を思い出していたと思います。それは、ノアの大洪水の後に神様が空にかけてくださった、虹の事です。神様は地上の人々の行いが悪いのを見て、全ての人々を滅ぼそうと決心なさいますが、神様に従ったノアとその一族と、動物の一つがいつづを助けてくださいました。大洪水の後、ノアが船から下りて真っ先にした事は、祭壇を築き、神様に礼拝をすることでした。そのとき神様は空に虹をかけてくださり、ノアにおっしゃいました。「私は二度と全人類を滅ぼすというような災いを地上に起こさない。この虹がその約束のしるしです。あなたたちは地に下りて、産めよ、増えよ、地に満ちよ。あなたたちを大いに祝福します。この虹は私がいつもあなたたちを祝福しているしるしです。」

ブラックモア先生はこの虹のお話を思っていたのだと思います。「神様は私たちをまた祝福してください。私たちは神様の御心に従って正しいことをしています。神様の祝福がきっとあります。」そういう神様への信仰と将来を信じる希望をもっていらっしやっただのだと思います。もう、落胆するしかない、とい

うようなそのときにも、神様の祝福を信じ、神様が私を作り愛してくださることを信じて、希望をもって前進する、これが建学の精神、「敬神奉仕」の精神で生きるということに他ならないと思います。

最後は、第十五代、第十七代校長で、カナダ人宣教師による最後の校長となったミス・ハミルトン先生の時代に校章、制服、学院標語、校旗、校歌が出来ました。そして、ヴォーリスによる近代建築の校舎が出来ました。

「敬神奉仕」という学院標語が創立 50 年近くなって出来たことは不思議な気がします。100 年史や他の資料を見てみると、生徒や先生から学院標語として何が良いか、募集したようです。その中に「敬神奉仕」もあったのですが、私は、この「敬神奉仕」は今ここで見つけて決めたものではなく、創立の始めからずっと学校生活の中に流れていた空気、雰囲気と言葉にしたものだったと思います。それほどこれから生まれてきたのか、というと、もうすでに繰り返し述べていますように、創立時からこの時まで、色々な形で教育に関わった宣教師の先生方や教職員や、教えを受けた生徒、卒業生たちの生き方(心の思いと、言葉と、行いの全て)を文字にしたものであると思います。

創り主である神様を第一として愛し敬い、正義と愛をもって隣人に仕える、という生活が、周囲の人々に知らないうちに感化を与えていたのです。特に、宣教師の先生方の生き方そのものが、生徒にも教師にも学校全体のモデルになっていたのです。そして今日でも私たちにとって先生方の生き方はモデルとしてあり続けていると思うのです。

校長として大きな仕事を成し遂げ、日本人校長に後を託したハミルトン先生は戦争のために敵国人となって、たった一人さびしくカナダにお帰りになりました。帰国してからもカナダ国内に設置された敵国人である日本人の強制収容所の中で、日本人のためにお働きになったのです。先生ご自身も日本で敵国人である苦しみや悲しみを味わわれたと思います。収容所に入ることはありませんでしたが、教室で教えることも、全校生徒の前に出ることも、別れの挨拶も出来ない状況におかれました。愛する日本から離れなければならない辛さ、自由に歩き回ることが出来ない不自由さを味わったからこそ、強制収容所の日本人の悲しみや苦しみや辛さを理解することが出来たのだと思います。

池田院長、理事長先生がよく引用される、「喜ぶものと共に喜び、悲しむものと共に悲しむ」、そういう柔軟で優しく暖かな愛の心を持っておられたことを感じます。

これらの宣教師の先生方から教えられることは、どなたも強さと優しさ、正義と愛を併せ持っていたら、ということです。揺るがない神様を基準にして、自分を律していたから、どうしても厳しさが出ますし、強さが生まれます。それと同時に神様の憐れみと愛によってのみ、私は生かされているのだ、と信じていましたから、謙虚さと愛がありました。

神様を愛し、人を愛する、というのは、神様との間に平和を持ち、人との間に平和を作り出して生きることではないでしょうか。具体的な奉仕活動が色々な事情で出来ないことも多いと思います。「敬神奉仕」の精神を生きるとは、具体的な行動をすることは勿論ですが、それだけではなく、自分を第一と考えないで、神様の前に謙虚になって人との関係を平和に生きることだだと思います。争いや妬み、憎しみや

悪口ではなく、平和、平安をつくりだす、そこに愛が生まれるのでしょう。あるいは愛がそれをさせる。相互に関係し合っていると思います。

卒業生の方たちが、色々な場所で色々な立場で本当に良い働きをなさっていることを知っていますので、その方たちを見て東洋英和がどんなに良い学校かわかります。私自身もそこに連なった一人として「敬神奉仕」の精神を生きていきたいと思います。